

## 掌編小説集 続「子、親を選べず」



真之介君も小学校の年。

そろそろお年頃になっていたので子供の作り方や、子供を作る前の「とっても気持ちが良く楽しい事」にムラムラと興味が沸いてきて、実際にはまだ自分自身でそれを試した事はなかったのですが、そのシミュレーションとしてこっそりパソコンでストーリーミグ版の「お宝ビデオ」を見る様になっていました。

ところがある日自分の部屋で、心臓ドツクン、パソコンしていた処に突然お父さんがノックもせずに入ってきて

「おい、真之介、わしのパンツどこ行ったか知らんかあ???」

んっ、おまえ何やっとう?何で慌ててパソコン閉じた?あん?」

「う、うっ、うっ」

と、真之介君が冷や汗たらたらで、ドギマギしているとお父さんは

「何も隠さんでええわ。お宝ビデオ見とったねえやろう?みるなら堂々と見いや」

と思いがけない事をいいました。  
そうして

「わいも、大好きやでえ。そもそもE、せんねえやったら、人類の子孫である子供、できひんねえやから、Eが悪かろう筈がない。無論相手の同意なく、下にムシロ一枚引かずに押し倒して無理矢理はいかんぞ。同意の上が原則やが、それにしても「気持ちもよく楽しく且つ人類存続上有意義なそれ」を罪悪の如く言うからおかしいなる。

E口話一つした位で大騒ぎするから、妙な犯罪が増えるねえや。むしろ大っぴらにした方が余程犯罪が減るの、ちゃうかあ?」

とお父さんは自説を一気にまくし立てました。

いささか呆気にとられた真之介君でしたが、ガキンチョであるお父さんより自分の方が余

程大人だと思っている真之介君は

「おとん、そんなこと外でいうたら、只でさえ「妙な奴や

」いわれとうののに、エロがついたら「どエロ&妙な」奴や、言われるようになってもうで。ここだけの話で、内緒にしとお、さか、外でいうたらあかんでえ」

「くらあ、ガキのくせして何を猿知恵働かしとおのじゃ。思った事はハツキシいうた方がええねえや。心身の健康の為にはなあ。大体、がや、人間、万人に好かれる事など、ありゃせんがね。どんなにできがよおても、それが逆に妬みやそねみを買っ元になうてまう。しやから万人に好かれようなんていう事自体、ありエヘン世界を追っ掛ける様なものやから時間の無駄、ちゅうもんやあ。人気好感度100が満点やったら、わしなんか、一か心やで。何でも100%はないから〇とは言わんが、あつた処で「一か心やで。

しやけど、それで御の字や。それ以上は求めへんさか」

真之介君は又々呆気にとられました。今迄とは少し違ってお父さんの事が多少羨ましくなりました。

「そこ迄言えたら、気分ええかも」

内心密かにそう思いました。

それにしても周りの大人と違っていつも予想外の事を言い出すお父さんに、イササカ疲れを覚えたりもします。

なので、心の中で又

「ほんま、手の掛るガキンチョや、おとんは。フォローが大変やわあ、堪忍してほしいわ」と呟きました。少し無理をして。